

名前：森 芳信さん（仮名）

享年 57 歳

<b>【略歴】</b>	
①1949年 石川県生まれ	⑥2002年7月 関連会社へ出向。
②1970年 高専を卒業後、祖父が代表を務める 地元企業へ就職	⑦2003年10月 人間関係や会社方針に合わずに悩む うつ病発症し、休職
③1976年 結婚	⑧2004年8月 本社へ異動。すぐに腸閉塞で入院の ため休職
④2001年5月 胃癌発見され手術を受ける。 仕事休職	⑨2006年1月 部署異動。慣れない環境でプレッ シャー強くうつ病悪化
⑤2001年10月 職場復帰するも作業能率が上がらず	⑩2007年7月 自宅で自死
<b>【人柄】</b>	
典型的な石川県の男性でとにかく口数は少ないが、愛情たっぷりで家族思いの人だった。一人で黙々と仕事をこなすタイプで、仕事熱心。仕事の愚痴や悩みなどは話さず、辛抱強い。努力家で、汗が似合う男性。家で仕事の話はしない。	
<b>【自殺に至る経緯】</b>	
1976年 高専卒業後に祖父が代表を務める製綿会社に就職し、26歳時に結婚。基本は日勤勤務だがこの頃は3交代制の勤務もこなしていた。作業場での仕事であり、汗びっしょりになり帰宅し、お風呂に入って、食事して、晩酌して寝るという生活だった。食事では「おいしかった、お母さん旨かった。」と妻によく声をかけていた。	
2001年5月 順調に生活をしていたが、潰瘍が以前からありかかりつけ医に定期的な診察をしていたが、その際に胃がんが発見される。がんの告知を受けた時には驚きがあったが、初期段階ということもあり手術に踏み切る。手術では転移は見つからないものの、状態が悪いため胃の5分の4を切除する。約一ヶ月後に退院し、3ヶ月ほど自宅療養する。	
2001年10月頃 仕事復帰。会社の方針として、軽作業や時間短縮のようにリハビリ的な就業はなく、今までどおりに働けるようになってから復帰することを望まれる会社であったので、体力も落ちている中で、肉体的には厳しい状況であった。	
2002年10月 100%本社出資の関連会社へ出向。今までと仕事の内容は大きく異なり、慣れない仕事にも関わらず重労働で、十分な指導もなかった。その上、業務上の必要性からなのか、退職を促すためなのか分からないが会社内での部署異動も頻繁だった。また、出向のため本社の給料体系での契約となっていて、子会社の社員からすると、「給料の高い、役に立たない者がまた送られてきた」という雰囲気もあり、職場の人間関係にも悩んでいた。社長からは常に「自分の方針が不服なら、いつでも辞めてもいいんだぞ」と言うほどワンマン経営であった。	
2003年4月 業務内容や人間関係、経営方針が合わず、次第に毎日ため息をついて出勤するようになる。内科受診。医師に「死にたい」と初めて訴える。医師の勧めもあり5月より休職。誰よりも先生を信頼していて、3ヶ月ほどはカウンセリングや点滴を受けながら治療をしていたが、専門医の治療を勧められ精神科を受診し「うつ病」を発症する。	
2004年8月 復職。復職後は本社勤務に異動。8月30日に腸閉塞で入院。休職ではあるが、もうこのときには有給も消化してないために、収入の減少を気にして、退院翌日には職場復職を希望するところを妻に止められ、9月15日に復帰する。しかし、体力の低下などから鬱状態は悪化しその後休職。精神科への受診は	

大塚先生  
一定期間のリハビリ的  
勤務が必要ならば、  
商工会議所  
約7割が中小企業での  
リハビリ的業務が期待  
される。あつた日配  
運転している。  
労働基準監督署  
職場復帰支援のながれ  
5/25/26に授業している。  
訪ねてみる。

2週間に1回のペースで通院するも、病院でもあまり話をしていなかった。

2006年1月

部署異動。異動先はハード面では以前よりも過ごしやすい部署で上司からの配慮のある異動ではあったが、他の社員よりも作業能率が上がらないために、人事考課の会社としての評価としては低く、そのことをプレッシャーに感じていた。表情が優れなくなり、断酒していたアルコール量が増え、不眠が続く生活となる。

2006年7月(前日)

母親との最後の思い出を作ろうとしたのか、一人暮らしをしている母親との買い物に行く。

2006年7月

妻が仕事に出かけ、息子も外出をした後に自宅で首を吊り自殺。

### 【自殺の危機経路】

